

疥癬こぼれ話

国立感染症研究所 ハンセン病研究センター（東京都）
センター長 石井 則久

● はじめに

東洋医学で皮膚と五臓六腑、皮膚と全身状態の相関性を重視していることを知り、西暦610年ごろ（隋の時代）の中国の医学書『諸病源候論』を紐解いてみた。ちなみにこの医学書には多くの疾患の病因と症候が記述されており、皮膚所見や皮膚病についての記載も数多く残っている。

「疥癬」は「疥」と記載されている。「疥」は皮膚症状によって、大疥、馬疥、水疥、乾疥、湿疥の5つに分けられる。これらの症状は順に、膿疱、結節、水疱、痒みが目立つが皮疹なし、丘疹、である。いずれの疥にも針で摘出しづらいほど小さな生物が住んでいる。すなわち小さな生物が原因の皮膚病であることがわかる。

一方、1870年ごろ、アメリカ人宣教師が英語の教科書の一部を口訳し、それを林 湘東が中国語に筆述した『皮膚新編』を上梓した。これを中嶋 弘氏（横浜市立大学 名誉教授）が日本語訳したものが手元にある。そこでは疥癬を「湿癩」としてあり、顕微鏡で観察した生物が図示（図1）されている。1000年の間になぜ「癩」という漢字があてられたのか不明である。なおハンセン病は「麻瘋」あるいは「笠罽」などと記載されている。おそらく「癩」と「疥」は近い関係にあるのではないだろうか。



図1 ヒゼンダニ

翻約 著述 ほか：皮膚新編、清水 卯三郎：57, 1875（国立国会図書館蔵）

● 疥癬とハンセン病は貧困の病

疥癬とハンセン病との関係をここで触れたい。明代の『瘡瘍經驗全書』には贅癩の自筆による皮膚症状の図があり、これが疥癬を思わせるもので、疥癬と「大麻風毒＝ハンセン病」の合併を思わせる。また1506年ごろの『癩瘍機要』には、ハンセン病が悪化すると疥癬様の皮疹が生じるとの記載がある。興味深いことに、ハンセン病の病原菌であるらい菌（*Mycobacterium leprae*）を発見したハンセン博士（G.H.A.Hansen）の義父、D.C.Daniellssenの書『ハンセン病アトラス（Atlas de la Lèpre）』（1847年）には、疥癬を合併したハンセン病患者の手のイラストが載っている。中国やノルウェー、も

ちろん他の国も同様であるが、疥癬とハンセン病の合併は、「貧困」という共通点があるのであろう。狭いところで衛生的にも栄養的にも不十分な生活をしていると、感染性の弱いらい菌も、また雑魚寝病であるヒゼンダニも容易に家族や同居人にうつした（伝染、感染）のであろう（図2）。



図2 疥癬を合併するハンセン病患者の手

後日談だが、『ハンセン病アトラス』の図は角質増殖を伴った疥癬症例であったため「ノルウェー疥癬」とヘブラ（F. Hebra）が命名した（1852年）。ノルウェー疥癬（角化型疥癬、痂皮型疥癬、蛎殻様疥癬ともいわれる）は重症型で、数100万匹のヒゼンダニが皮膚表面の厚い角質内で生活しており、治療に困難をきたすとともに、他の人へ容易に感染させ大流行をきたす。

疥癬の治療については、1500年代の明時代の『本草綱目』に大風子油（外用、内服）の記載がある。「いぎり」という木の種子を搾って得た脂肪油であり、これがハンセン病にも処方された経緯がある。江戸時代ごろから使用されていたようである。明治時代、日本でも堺（大阪）の油商、岡村平兵衛が精製した良質の大風子油がハンセン病治療に広く使用されたが、1950年代にはスルホン剤によって大風子油時代は終了した。日本で大風子油が疥癬治療に使用された記載は見当たらない。

ご存知のように草津温泉（群馬県）は恋の病以外の万病に効き、特に皮膚病（疥癬、梅毒、ハンセン病など）には特効するといわれていた。先に述べたが、疥癬とハンセン病は貧困の病であり、合併することは日本でも多く、草津温泉に浸かるとある程度改善するので我先にと草津で湯治をしたのである。ハンセン病は第二次世界大戦後有効な抗生物質によって治る病気になった。一方、疥癬はイオウ剤のみが保険適用の外用薬で、皮膚科医は四苦八苦している。近々有効な外用ローションが上市されるとのことで、大いに期待したい。